米空母母港化 50 周年抗議！原子力空母の配備撤回を求める 10.5 全国集会アピール

米海軍が横須賀基地に空母ミッドウエーを配備したのは 1973 年 10 月、当時数年程度と言われた「空母の母港」は、今日で 50 年に達しました。

2008 年からは配備艦が原子力空母となり、現在はロナルド・レーガンが配備され、来年度再びジョージ・ワシントンへの交代が予定されています。

米国外で「唯一の空母の母港」は永続化した状況で、空母戦闘団の存在は、まさに巨大軍港・出撃基地を形成しています。母港化容認をめぐって、横須賀市側が求めた「核兵器の持ち込み」と「原子力空母の寄港」反対は、日米両政府のなし崩し的対応で無視され今日に至ります。

9 月中旬によていされた空母レーガンの出航が、数回にわたり延期され、出航中止状態となった要因に「動力系装備の不調」との情報もあり、住民の安全を置き去りにして出入港が繰り返されている空母原子炉の危険性を再認識する必要もあります。

横須賀に配備された空母の存在なくして米軍のアジア・中東戦略は成り立ちません。空母戦闘団のこれまでの役割を振り返れば、湾岸戦争、イラク、アフガン侵攻、常にその先頭には空母戦闘団があり、トマホークミサイルと艦載機による爆撃で膨大な殺戮を繰り返しました。「空母の母港」を返上させられなかった私たちも、これに加担してきたと言えます。

2019 年 5 月、当時のトランプ米大統領は「横須賀は米海軍と同盟国の艦隊が並んで司令部を置く世界で唯一の港」と表現し、日米の軍事一体化を礼賛しました。安保法制の成立以降の海上自衛隊の著しい増強によって、この現実が構築されました。今後も、海上自衛隊の増強は、主力艦「かが、いずも」の本格空母への改修、その改修後のステルス戦闘機 F35B の搭載と日米共同運用計画、先制攻撃型自衛艦とトマホークミサイルの配備などとどまるところはありません。旧軍港都市転換法（軍転法）が掲げた理念、横須賀の平和産業港湾都市への転換ははるか彼方に遠のいています。

「100 年たっても空母の母港」「海自イージス艦からトマホーク発射」横須賀が将来このような事態に至りかねない現状を、打開しなければなりません。長年にわたり艦載機の爆音解消を求めてきた県央の闘い、欠陥機オスプレイの低空飛行と訓練反対など、首都圏の仲間と連携を強め、基地の押し付けと不当弾圧、日米地位協定の不条理と屈服に対峙する沖縄の闘いとも共闘して全国的な運動へ発展させましょう。

困難な状況下、私たちは、ここ横須賀ヴェルニー公園に結集しました。

改めて、米原子力空母の母港撤回、「安保関連法」の廃止、「敵基地攻撃力」などの自衛隊強化反対を確認し、「戦争推進政策」に断固立ち向かいましょう。

2023 年 10 月 5 日

集会参加者一同